

## 論文番号 3

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名(原題/訳)

Self-reported life satisfaction and 20-year mortality in Healthy Finnish Adults

自己記入式満足度と20年死亡—Finnish Twin Cohort研究から—

執筆者

H. Koivumaa-Honkanen, R. Honkanen, H. Viinamaki, K. Heikkila et al

掲載誌(番号又は発行年月日)

American Journal of Epidemiology 2000; 152:983-91

キーワード

Cohort studies, happiness, health, mortality, personal satisfaction, quality of life

前向き研究、幸福度、健康、死亡、満足感、生活の質

要旨

自己記入式生活満足感と死亡に関する前向き調査を行った(1976年から1995年)。Finnish Twin Cohort研究という全国から抽出した健康な大人(18歳から64歳 22,461名)に対して、1975年時の生活満足感と死亡に関する指標調査を行った。

生活満足感の調査項目として、生活自身に興味を持っているか、幸福度、寂しくない度合い、ぐつろぎ度(各スケールの範囲4-20)を高い、中程度、低い群の3つのカテゴリーに分類した。死亡データはコックス重回帰分析で示した。生活満足度が低い群では死亡率が高くなかった。年齢調整をした上での総死亡、疾患別、傷害別の危険度は満足度が高い群に比して低い群は2.11倍(95%CI:1.68-2.64)、1.83倍(95%CI:1.40-2.89)、3.01倍(95%CI:1.94-4.69)であった。また、婚姻の有無、社会階層、喫煙習慣、飲酒量、生活活動度を考慮した時の危険度は、1.49倍(95%CI:1.16-1.92)、1.85倍(95%CI:1.01-1.82)、1.93倍(95%CI:1.19-3.12)であった。

特に、男性の多量飲酒者群で生活満足度が低くなるに従って死亡率が高くなっていた(3.76倍(95%CI:1.61-8.80))。女性ではこのような傾向はみられなかった。

これらの知見から、生活満足度は死亡に関する指標になり得ることが分かり、健康指標に役立つことが明らかになった。

↑